

令和 8 年度第 2 学期始業式式辞

おはようございます。

夏休みに入って早々、熊本地震が起き、8 月お盆の時期には、千葉豪雨災害がありました。被災された方々に謹んでお見舞い申し上げたいと思います。災害の多い日本列島に住む者として、心配で不安な気持ちは増すばかりです。本日、本校でも防災訓練があります。被災地の落ち着きを願いつつ、私たちは日常への感謝と防災意識を忘れずに、毎日を丁寧に過ごしていきたいものです。

さあ今日から 2 学期のスタートです。夏休みは有意義に過ごしましたか。1 学期の終業式で話した「意図的な経験を積み、整理を加えること」はできましたか。2 学期は文化祭、体育祭をはじめ学校行事で協力をし、キャリア教育を通じて進路意識を高める時期です。今後も「意図的な経験を積み、整理を加えること」を意識して、実力をつけていきましょう。

さて、穎明館生の皆さん、「あなたならではの EMK を語れ」、今日は「あなたならではの M (Morality) 道徳を語れ」、M (Morality) 道徳の話をしたいと思います。「私ならではのカント」と題して、18 世紀ドイツの啓蒙思想家、イマヌエル・カントについて語りたい。少々、硬い話ですが、ついてきてください。

まずカントは、人間をどうとらえていたのでしょうか。

ここに『実践理性批判』をもってきました。カントの記念碑にも刻まれている有名な箇所を読み上げます。

「ここに二つの物がある、それは——我々がその物を思念すること長くかつしばしばなるにつれて、常にいや増す新たな感嘆と畏敬の念をもって我々の心を余すところなく充足する、すなわち私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則である。」

「私の上なる星をちりばめた空と私のうちなる道徳的法則」、すなわち自然界の秩序と人間の内面、道徳が素晴らしい、と言っています。ただし、人間は肉体をもち、衝動のまま生きる限りにおいては自然界の秩序に縛られたままである。人間は衝動と欲望に任せて生きようとする傾向を抑えることができる。カントはそこに「自由」の可能性を見ました。

カントは、道徳法則の意識について、「汝、かく為すべし」、すなわち「したい」と思いながら「すべし」と内なる道徳法則をもつところ、欲望を抑え、自らを律するところに真の自由、「自律としての自由」はあると考えました。そして、ここに人間の尊厳、尊さがあると考えたのです。いわゆる自由のはき違い、自分勝手とはずいぶんかけ離れた崇高な考え方ですね。例えば、今、眠たいと思っている、そこのあなた、眠気を我慢して、私の話を一所懸命聞こうとするところに、カントの言う自由、「自律としての自由」はあるんですよ。わかりますか。人間って素晴らしいと思えてきませんか。

このようにカントにおいて、人間とは自由の主体、道徳的責任の主体でありました。そこに人間以外の物にはない尊厳があり、人格と呼んだのです。ちなみに日本の教育基本法第1条では、「教育は人格の完成をめざし………」とあります。私たちの日々の教育活動の目的は、カントの言うところの「人格の完成」にあるのです。「人格者」と言うと、一般的には「立派な人」と思われますね。教え教えられる、あるいは主体的に学ぶことによって人格者、立派な人になってほしいというのは、近代的な価値観の一つなのです。

頤明館では「人格の完成をめざし」、進学教育と人間教育にしっかりと取り組んでいる、と私は学校内外に伝えています。生成AIの進歩が目覚ましい今日、皆さんの人格、人間性がますます問われていく時代になります。お互いに人格、人間性を磨く努力を続けましょう。

それでは、「人生の目的は何か」。カントは私たちに問いかけます。一般的には「幸福になるため」という答えが返ってくるでしょう。

しかし幸福と言っても、他者に善い行いをして得られる幸福もあれば、苦痛を強いて得られる幸福もあります。いじめが悪いとわかっているでもいじめられるのが嫌でいじめる側に回ったり、見て見ぬふりをしたりするのも、自分の幸福のためと言えるかもしれません。また、悪いとわかっているながら不正に手を染めるような事例も世の中にはあります。お金という「幸福」を求めることで「悪」へと導かれる場合もあるでしょう。皆さん、自分の行為の動機を点検してみてください。自分の利益や快樂、幸福の実現こそが本音であって、その手段として「善」を行っていることはありませんか。

カントは、この世界に無条件に善とみなされるもの、それは「善意志」、すなわち、「利害や打算を考えない『汝、かく為すべし』という命令に従う意志」だ

けである、と考えました。例えば、才能やお金をたくさん持っていても善い意志を欠くと傲慢になったり、他人の害になったりしがちですね。カントは道徳法則、すなわち動機の純粹さに基づく行為のみを善としたのです。

ただし、カントは決して幸福を否定したわけではありません。カントは、自宅にゲストを招き、ワインを傾けながら様々な世間話について談笑することを楽しみにしていました。道徳的判断を迫られない場面では大いに幸福を楽しむ生き方を貫いていたと言われます。

さて、「善と幸福」についてもっともっと話したいことはありますが、あえてここまでにしておきます。興味をもった人は、さらに自分自身で調べて、考えてみてください。皆さん、それぞれの善と幸福の「探究」を期待しています。

ここでは最後に、カントの『永遠平和のために』の一節を紹介しておきます。カントが自由な諸国家間の連盟、国際連盟を構想していたことは有名ですね。実際に誕生したのはカントの死後 100 年以上経ってからでしたが、その先見性には頭が下がります。象徴的な言葉をいくつか読み上げます。

平和というのは、すべての敵意が終わった状態をさしている。

戦争状態とは、武力によって正義を主張するという悲しむべき非常手段にすぎない。

常備軍はいずれ、いっさい廃止されるべきである。

いかなる国も、よその国の体制や政治に、武力でもって干渉してはならない。殺したり、殺されたりするための用に人をあてるのは、人間を単なる機械あるいは道具として他人（国家）の手にゆだねることであって、人格にもとづく人間性の権利と一致しない。

行動派を自称する政治家は、過ちを犯して国民を絶望の淵に追いやっても、責任は転嫁する。

戦争を起こさないための国家連合こそ、国家の自由とも一致する唯一の法的状態である。

平和条約は一つの戦争を終わらせるだけであるが、平和連合は、あらゆる戦争を永遠に終わらせることをめざしている。

永遠平和は空虚な理念ではなく、われわれに課せられた使命である。

穎明館生の皆さん、どうでしょうか。歴史的に国際連盟が失敗したことや、現在の国際連合に課題があること、中東情勢を語るまでもなく国際紛争がやまないことは、承知でしょう。それでも、人類には永遠平和への理想は消え失せていない、と私は信じます。この本は池内紀さんの訳で、藤原新也さんの写真も多く掲載されており、大変読みやすくなっています。ぜひ手に取ってみてください。

ところで6年生、40期生の皆さん、カントの規則正しい生活習慣の話を知っていますか。毎日早朝の5時5分前ちょうどに起床しました。そして決まった時間に同じルートで散歩をしたため、ケーニヒスベルクの街の人々は、散歩中のカントを見て、時計を直したと伝えられています。一度だけ、ルソーの『エミール』を読んだ時に、夢中になって散歩を忘れたというエピソードもあります。

ここで私は、受験生として規則正しい生活をしなさい、などと野暮なことは言いません。実は昔、このエピソードが、とある有名国立大学の英語の長文で出題されたそうです。「先生の授業で聞いて内容を知っていたので理解しやすかった」と、受験した生徒に大変感謝された記憶があります。一見、受験に直接関係なさそうな話が、本番に役立つことは意外にあるものです。これから受験生にとって、焦りや不安が大きくなる時期ですが、受験勉強の中でこそ、学びや生活を楽しむくらいの気持ち、興味や関心を大切にしてください。

頑張れ6年生、40期生！いつでも応援しています。

穎明館生の皆さん、今日は、「あなたならではのM (Morality) 道徳を語れ」、M (Morality) 道徳の話ということから、「私ならではのカント」と題して、18世紀ドイツの啓蒙思想家、イマヌエル・カントについて語りました。私にとっての道徳、と言えばカントを外せません。「自律としての自由」、「善意志」、そして「永遠平和のために」………何かが残し、あなたの道徳観に役立てば幸いです。

カントの思索は、近代思想全体を視野におさめ、人類史的立場から人間の理想を追求したと評価されています。そのカントは、亡くなる前に、妹や友人たちに囲まれて、水で薄めたワインを口に運ばれ、“Es ist gut.” (これでよい)、と最後の言葉を遺したとされています。“Es ist gut.” (これでよい)、と言えるような2学期、学校生活、そしてこれからの人生にしていきたいものです。

以上、令和8年度第2学期始業式式辞といたします。